

リベルテール



2月号

Le Libertaire VoL, III, No 3

無政府主義者の機関誌

昭和四十五年九月 四日才三種郵便物認可
昭和四十七年一月十五日発行 一十七号

定価一〇〇円 (送料共)

目次

横井軍曹の凱旋	三浦 精一	1
仏教とアナキズム	志賀口 雄之介	2
論争の渦(3)		7
たそがれ日記	山 鹿 泰 治	14
野 火		15
「労働者の政治的能力」について	莫 空 人	20

横井軍曹の凱旋

南の島でたった一人で生き抜いた一人の日本兵の物語りは、人間の生きる力の強さに世界中を驚かせるとともに、いろいろなことを考えさせてくれる。ロビンソン・クルーソーと共に彼も二十八年を「歴史の停止した時間」を生きた。発見され、同胞の歴史の中に帰って来たとき、彼はなを大元帥陛下の忠良なる臣民だった。

右翼や防衛庁は彼の忠節を心事に感激するだろう。しかし僕は「国家の教育の恐ろしさ」を、あらためて感じるのだ。新兵を馬小屋につれて行って「貴様たちは一錢五厘のはがきで召集できても、馬はそうは行かないのだ」と言い聞かせる上官。馬の世話に手落があって自決した兵隊。上官の命令は天皇の命令とされた階層制。そうしたことを当然として忠義をつくし生命をささげる人民。

こうした恐ろしい教育を国家はあえてしたのだ。そしてこれは現にロシアでもシナでも行なわれている。その革命が後進国としてのもので、利己的な先進国に追いつき追い越すための必要にせまられたためである。日本の明治政府の軍国主義もそのためであった。

こうした政策に幸したのは、ロシアでは帝政に忍従した民衆があったこと、日本では徳川封建政治下の民衆があったことだ。いずれも後進性による悲劇だ。敗戦後の日本にとってこの悲劇は終っていなかった。今でこそ諸外国は日本を経済大国とおだてている。何がこれをつくり上げたか。

日本の会社、工場、商社の実体を見よ、明治以来ではあるが官庁と同じピラミッド型の階層組織である。大学出るのもこの組織の中で有利に出世できるためで、入社すれば一にも二にも会社の利益のためにモーレッツ社員になることが称賛され、労働組合員でもチンソ会社のために患者を追払う。利潤に奉仕する奴隷的心性だ。経済大国はこの成果だ。喜ぶべきことだろうか。このエコノミック・アニマルの権益が東南アジアのどこかで被害を受けるような事態が起ったとしたら、自衛隊が保護の名で出ないと言えるだろうか。資本主義に奉仕するために防衛予算は拡大されるのではないか。軍国日本は厳存しているのだ。国家が教育に干渉するのはこのためではないか。資本主義政体でも共産主義政体でも形式こそ異っても政経不分離なのだ。政治家が要求し、資本家が要求するものは、その階層組織に「こ」とあげせぬ」忠誠な過去の横井軍曹の心性である。

(1)

政治、すなわち人間の行為の集中的効果を期待して行なわれる情報管理システムが、宗教を忘れていているということは、かつてなかった。国家という情報管理の、具体的実施組織が、その管理の過程において、なんらかの形で、宗教をその管理情報の一部にしようとして試み続けてきた。—— 続いている。

宗教は、あるときは巨大な、あるときは微弱な、情報システムとして、政治との、観念的な、ということは情報パターン内での操作に於ける弁証法として、あるいは、具体的な闘争、図式的な戦闘の対立学として、少くとも「変貌」を、いわしめてもらうなら、反・合をくり返してきている。

宗教、すなわち、人間の存在の集約的な意味を求めて展開された情報活動は、政治を必ずしも、その必然的な活動の対象として、この過程のうちに組みこみはしない。しかし、時として、鋭い対立のうちに、根本的な対立者として、政治をとらえることはあったし、また、あるであらう。

(2)

何らかの形で、政治と宗教を考察する場合、宗教を、以上のどの段階で捉えるか、どのパターンにおいて評価するかで、革命、あるいは自由における意義は一変する。ポイントは、もうひとつある。日本人の宗教概念の混乱による、政治と宗教という図式の流動性である。近代において多くの思想的遺産をヨーロッパに負うている故に、図式の一方にあるのは、まったく奇妙なことにキリスト教なのだ。そして、明治以来の教育——つまり国家による情報管理のひとつの結果として、天皇「神道」については、土俗性のうちに還元し、図式化、対立化して、自ら考えようとしないう。あいまいな情緒のうちに、「管理」に甘んじている。

宗教一般なるものはたとえ百科辞典の項目として以外にはない。同様に、仏教一般なるものもない。同一化、ないし、あいまい化は、宗教、あるいはそこに集約される人間存在を管理しようとする者の意図的な偽構のあらわれにすぎない。キリスト教は、そしておそらく回教も、「宗教一般」なる概念を拒否し、拒否したところから出

発する。彼らにとって宗教は唯一であり、「一般」はない。仏教においては、それ自体が二つに分裂する。ただひとつであるが故に、一般でないものと、一般がない故に、ただひとつでないものと。

前者の傾向は、私見のかぎりでは、法華経のテーマであり、後者の傾向は、浄土宗の経文にみられる。

ここで補足するならば、法華経は仏教の経文でなく、バラモン教の経典が混入したものであるという説（『法華経』岩波文庫、後書き）があること。もうひとつは、浄土系の経文に、キリスト教の影響があるという仏教学者間の一般的常識である。

法華経については、当面のテーマではない。後者については、キリスト教の排他性、唯一性(?)は、影響しなかったと判断しておく。浄土系の教義は、キリスト教から、学んだとしても、その絶対者の、絶対的な愛と、そして敢えていうなら、その自由のみをうけ入れたのである。

(3)

浄土系の経典についての、概論的説明ははぶく。しかし、その「浄土」のイメージは、当面のテーマである。浄土イメージの条件は、『大無量寿経』中の「四十八願」に端的に述べられている。この数そのものは、二十四願

から四十九願まで、多少の異同があるが、一項づつの解説は、不要であらう。

代表的なものとしては、そのうちの第四「無有好醜の願」、第十八「念仏往生の願」、第三十五「女人成仏の願」などで、第四願は、柳宗悦によって、「美醜の別、ある無し」とよまれ、民芸の美学の原点になっていたことと知られている。浄土においては、一切の形あるものに美と醜の差別があつてはならないというのか、柳宗悦の美学——「仏教美学の怨願」であった。

サンسكريット他からの日本語訳によれば「好醜」の言葉はなく、天人と人間の区別の超越を説く願となっているが、そのような変化ないし発展の考察は、仏典学の問題である。ただ、この願いのうちにこめられた、「…：業論がインドのカースト制度下の説明によってゆがめられた一面を暗示している。すなわち、容貌の美醜などは前世の業によると信じこませた業論が、インド社会に広まっていた事実を知るならば、浄土にかかる区別のないことを期待するのは当然であらう」(『大無量寿経』岩波文庫、二七五頁)(中村元他二氏訳註)

という、その背景となった人間のねがい、つまり一切の「業」——宇宙の必然性からの解放への希求は問題にしなければなりません。

この第四願にかぎらない。四十八願を一貫している、何といふべきか、「ドライブ」は、すべての「業」からの解放の一事にかかっている。

サンスクリット版によれば「天人たちと人間たちの區別があつてはならない」漢訳によれば「無有好醜」、柳によれば「美醜」の差別のないこと、は、「美」という「一瞬の天啓であり、われわれが無条件にその前にひれ伏す他にないもの」(サルトル)の持つ強制力、必然性、業からの解放を典型的に現在のわれわれに示していると思われる。

浄土とは、宇宙の大法則を超越した境地なのである。まして、いわんや国家、社会、科学、慣習などのフィクションの法則は、その絶対(の対極的位置)からは、無視されるべきものでしかないであろう。無視さえする要のなくなるものとなるのが問題だが――。

「彌陀の四十八願」――少しく正確に言えば、ダルマカール(法蔵比丘)の所願は、人間の規定する一切の条件の削減を願っているといえるのだが、それは、秩序(コスモス)と(カオス)、エネルギーとエントロピーの揚棄、あるいは超越ともいふべきものであり、そしてそれは、他方の文明において、玄門と呼ばれ、無何有と呼ばれた観念の状態、イメージのプロトタイプであろう。

そこにおいては、数すら無量大数のうちに、この意味を失い、普延のうちに存在は融和し、一切の区別・差別を失う。

もともと、一切の条件をなくすといっても、「悉皆金色の願」とか「寿命無量の願」とか「智弁無窮の願」など、新しい条件を示しているのではないかという考えもあるが、これは実際の人間の条件と、その段階、タイプが違う。同じ「条件」という言葉を使用しているからといって、同一の性格をもつと理解するのは論理の混乱をまねくみである。四十八願の条件は、あくまでも、業の下にある人間の条件を、超越する契機を示したにすぎない。すべての人間が金色に輝き、寿命は無限であり、知性は無量などという「条件」が、条件となり得るわけがない。あくまでも、これは、業(世界の法則)に対する人間のイメージの自由の問題である。

人間は論理のみで規定されているのではない。自らを規定しているのではない。論理の前に、構想が、そして構想の前に、イメージがある。論理はイメージの衣、あるいは武器にすぎない。イメージを変革する論理でなければ、意味はない。論理で勝ったところで、負けたところで、何事も始りはしない。

そして、イメージをかえるには、論戦よりは、芸術や、

哲学や宗教の方がより有効である。麻薬ないしこれに準ずる薬品も数えてよからう。行動や、ただ生活してあることがイメージのもっとも大きな要素であるのはいうまでもないが。経験あるいは体験は、論理にはない。それはあくまで、メタ経験であり、すなわち、メタ・存在であるのだ。

四十八願によって形成された浄土のイメージは、現実の法則の世界にある人間を、ある「原型」に目ざめさせるであろう。それは、人間の全き自由ということである。人間は業すらも超えた存在だということだ。そして、それは論理ではなく、イメージのレベルにおいて起こることである。存在の段階で変わるのだ。

(4)

一向宗一揆の構造はさまざまに論じられている。政治的要因、経済的要因、社会的要因など。しかし、それを個の問題として捉え、実存の、いいかえれば、人間の自由の問題として捉えたものは見当たらないようだ。

革命は、少くとも権力との斗争は、論理がやるのも哲学がやるのでもない。一個の人間が全的にコミットしてやるものだ。たとえば服部之総教授の「蓮如」には、この一視点が欠けている。一向宗一揆論が、図式を出ないのはこのためであろう。現代のわれわれの革命の伝統

になっではないのだ。蓮如が動かしたのは、戦術的要因でも戦略的情況でもなく、個々の土百姓、一人一人の人間だったはずだ。つまり自由だったはずだ。

自由という概念を、一向宗一揆の徒が、少くともわれわれと同じような概念を知っていたはずではない。しかしそれにも劣らぬ自由を実践したことは確かだ。(浄土)概念――一切の業、すべての拘束規範をこえた世界のイメージの前に、領主も国も、日本すらなかったであろう。そんなものを軽蔑し、否定する契機を彼らは信仰していたのだから。宗教はこのとき、アヘンではなく、ニトログリセリンであつたらう。彼らには、自己のイメージの裡の浄土に対する絶対的なイエスがあり、同時にそれは、現実の一切に対する絶対的なノーであつた。厚くとりまく不条理、すべてへの反抗であつた。虚仮暗黒の現実に対峙する、悉皆金色の人間存在の主張である。

(5)

われわれは多くの情報を与えられている。政治、経済、社会、科学、その他、多くの知識がある。ないのは、一切を「ノー」といい切るクソ度胸だ。

また、(唐突だが)つけ加えれば、人間の存在という絶対的なもの、人生という哀れはかないものへの見識とでもいふべきものである。

そして、人間ないし人生を深く知れば、いいかえれば自己のイメージの中心にすら包みこんでいけば一切を「ノー」といい切るエネルギーは生れる。すなわち自由であり得る。

一向宗一揆のメンバーが、そのエネルギーを、考えてみれば、実に簡単に、ダルマカラーの駄ボラ、いいかえれば神話からくみ上げたことに對し、現代は羨望すら感ずるのではないか。われわれは、このエネルギーに、仏教、すなわち浄土、もっと限定していえば「大無量寿經」への評価を新たにすべきであろう。

パンフ・機関誌・同人誌等の 印刷はバルカン社へ！

- リベルテールの読者へ格安でお引き受けします。
- タイプ印刷の標準価格表
- タイプ A4 (2000字) 1000円
- スリ 原紙一枚につき 部数×0.6+1000円
- 製本 総枚数×0.5円
- 紙代実費・表紙代は別
- オフセットもお引き受けします。
- ただし、お支払は、品物引き渡し時に、全額現金で。

論争の渦(三)

現代アナキズムの課題(三) 自然発生的運動とアナキズム

河合一民衆の自然発生的運動と職業革命家たちの運動が微妙に交錯して現代というものが一番混乱の時期にあるのではないかと思います。そしてその混乱とは自然発生的な運動が独自に新展開もはかれなかったという点と、そして党派が政治的戦略や戦術的引き回しによって生じたという点にあると思う訳です。六〇年代の後半をつらぬいたベ平連とか全共闘とか反戦青年委員会とかのような諸運動は政府権力やマスコミやマルクス主義の袋だだきに会って弱体化して大衆的エネルギーを保持できずにこの運動はもうほとんど崩れてしまっていて残っていない訳です。それでアナキズムとは民衆の運動に依拠する側面を持つている訳ですけれども、その民衆の運動がどのような意味で登場しなければならなかったのか、それをどう進めて行くべきかという提言をアナキズムというものが答えてきたことがない訳です。たとえば全共闘運動というものの初源的形態が革命運動に即結びつくものとはかぎらないけれども、現在の反乱ともいうものの一つの

★★
サロン・リベルテール
★★★

毎週火曜日六時三〇分から

中央線水道橋駅東南口 喫茶「終着駅」で
(ウニタへ行く道 右側二番目の横丁に入る)

アナキストのサロン。討論会、おしゃべり、読書会、宛名書き……内容は特に決めません。その時集まった人たちの組み合わせやふんいきによって決定されます。コーヒを飲むためにきていいし、みんなが討論のテーマなどを持ってくればなお面白いと思います。

原稿集募

自分の今考えていること、反論、批判、批評、質問、提案、自分たちのグループの自己紹介、運動の報告、そのほか何でもいいんです。

一行二十五字で、なるべくページにおさまるように
ただし、権力主義者やそのシンパからの自己宣伝のための投稿は、お断りしたいのです。

表紙用の絵も、誰か絵心のある人は送って下さい。

姿であり、運動としての答であると思った訳です。それに対して何んとか答えられるだけの力量がなかったために結局、自然発生的運動がマルクス主義的に歪曲されるとか、今みたいに地下運動としかなくていくほかないという気がします。これはアナキズムが現実との対応を失いつつある、あるいは失ってしまったという、根本的な問題であると思います。だから、アナキズムが全共闘とかベ平連とかそのような運動と重なり合う接点というものを、いま、求めたいと思います。それは組織論や運動論ではなくて、現在の苦悩の問題にあると思う訳です。で、運動それ自体が語ったのは、資本主義に対する異義申し立という言葉をサルトルが使っていますが、そのような告発であつたけれども、その時、五月革命の際だったと思います、サルトルはまたこのようなことを言っています。『大衆的討議がよくなされていたけれども、問題に対する本當の答というものは誰れも出さなかった。コリン・バンディだけが少し語れた。』このようにことしかサルトルは言っていない。このようなことを考えると、運動が学園に起つたり、労働運動が山猫ストとして起つたりしたそのような事実だけを持って来て、それをやった個人というものの欲求がいっただいどこにあるかということをつかみ出していくことがアナキズムの使命

というような気がする訳です。

笠原―あなたの全共闘に対する考え方は大体判ったのですけれども、そのような全共闘運動あるいは平連運動それと似た運動をさらに発展させて現在のどのようになっているのか、ということを考えているのですか？
河合―それは問題ではない。そのようなことをやってしまふことによってすでに自然発生的運動を壊すことだから、そのような展開をするのは間違いだと思っています。だから、何々を作っているというのではなくて、出ている問題に対する解答をつかむということが、今やるべき最大のことでないかと、思います。この前、塩さんが近代学校で言っていたけれども、今、未来社会に対する本当の理想というのがすでにアナキズムの中にはないから、それを作ることが重要であると言っていたけれども、そういう意味でなくても、それに似たような意味で現代の矛盾を汲みとるだけの力をアナキズムが持ちえなければ到底何もできないのではないのか、と思います。

信太―河合君の言うように、現在の主たる問題は組織論とか運動論の問題ではないと思います。六〇年代以降の左翼の運動は前衛党方式と自然発生的運動の交錯であった訳ですが、これは日本のマルクス主義を支配していたレーニン主義からの脱出過程であって、それに対する

る。

今日において、レーニンの時代のようにインテリゲンチアと大衆の關係の位相が全く相違しているにもかかわらず、吉本隆明のようにインテリゲンチアと大衆の關係を簡単に規定してしまうのは絶対に間違いである。それからゲランのように「意図者と被意図者」との關係に対する最後の言葉は、まだのべられていない、という様にレーニン主義の法則を現代にそのまま適用するのは誤りに思う。ゲランの言っている問題に関しては、コーン・バンデイが「無組織主義」を主張したり、「ぼくはメガホンだ」とか、という論理にあらわれていることによって、一つの解答を支えられたものと思う。

問題となるべき主たるものは、やはり組織論、運動論以前の、より根本的な問題、すなわち現代の先進資本主義の構造とこれに対する対応の問題ではないか、と思います。すなわちこれまでの革命論ではアナキズムもマルクス主義も現代に対応しえないのではないか、と思います。

河合―そのような問題の展開から初めて全共闘とか平連の価値が生まれてくるのではないかと思います。つまり、「パンの獲得」というような問題が要因となって、またそうしたものの要求で過去にはある程度の自然発生

拮抗を象徴していると思います。五月革命のときに、トニー・クリフが、五月革命が敗北した要因は確固たる前衛党が欠如していたためだと言っていたと思います、これは明らかに間違いです。そもそもレーニンの前衛党論がいまなお主張されるのがおかしいのです。レーニンは一九〇二年に「何をなすべきか」で目的意識性と自然発生性という二つの区分をしています、このような区別が生じたのはロシアの特殊な事情による。すなわち当時のロシアの大衆の大部分は農民であって、きわめて教育程度が低かった。そして反対にインテリゲンチアの数が絶対的少数であった。それにナロードニキの無前提的なナロードへの崇拜というものがあつた。このような条件に規定されて出たのが「何をなすべきか」なわけです。しかし、一九一七年、正確に言うところ、サンジカリズムの傾向が顕著になってくるにしたがって、党の機能の重要性というものをさほど重要視しなくなってきた。それゆえ、目的意識性と自然発生性という区分の仕方は、きわめて特殊な情況にしか通用しない。さらに、このように区分するのは官僚主義支配の危険性をはらんでいる。それゆえ、マハイスキー、バクーニンの「知的労働者」を排折する主張も出て来る必然性がある。

的な運動が起りえたという情況があつたけれども、現在のには正義の要求みたいものがあり、疎外に対する反乱というものがあるのでないかと思っています。だから平連みたいなものがよく使ったのは「内なるベトナム」であつたし、たとえば日大闘争の場合は日大という国家権力的な抑圧体系にあるものへの反逆があつたし、東大というものは、東大生の場合は官僚コースにおいて、資本主義の最尖端に行けるということに対して「自己否定」という言葉で、そのような存在を否定しているという運動の流れが爆発的な大衆的なエネルギーを持ちえたということが、老人や中年の人は別だけれども青年の心情にある一般的な流れではないか、と思います。ただ、その答を見つけれないというのが今の矛盾であつて……

信太―その答を見つげるためにアナキズムをクロボトキンがおこなったように総合的体系にしなければならな

いと言っているのですか？

河合―そうです。

信太―それが、ぼくにはちょっと異論がある。総合的にする必要というのはぼくも、そのような方向を志向すべきであると思うけれども、しかし総合的には絶対にない訳です。たしかに総合的な方向へ志向することは非常に必要であるけれども、たとえばルカーチとヤー

スバースの討論で、ルカーチは全体にまず眼を向けることを主張し、ヤースバースは全体を理解することは不可能であるし、理解しえるのは一部分にしかすぎない。それゆえ全体的・総合的観点から出発するのではなくして、個の実存から出発しなければ、ならないというようにことを言っています。ほくはヤースバースの方にくみしますが、やはり、個の実存から発して、総合的な方向へ行くのが正しいと思います。

河合―それは非常に理解できますし、そのような観点を別に拒否するつもりはないけれども、結局、そのような問題の展開からは、ほく自身の考えでは、何も出て来ないのではないか、という気がします。

x x x x x

笠原―全共闘運動を評価するとすれば、ほく自身のいままでやってきた場合ですが、あのような運動というのは、すなわちマルクス主義者の場合は反スタ・ベ平連の場合はベトナム反戦などということ言いますが、そのようなことでみんなが一人一人立上ったのではなくて、ある意味では曖昧な言い方ですが、近代に対する反逆、国家に対する反逆、というものとしてあったのだと、思います。だから、ベトナム反戦云々、あるいは反スタ、とかいうものは現在のほくにとってはあまり本質的な問

題ではない。だから、評価するとすれば、そのようなスローガンのものから立上ったのではなく、より根源的なところから立上った、ということ。そして、全共闘運動というものははらんでいた問題提起とは、いままでの学生運動というものが一つの党派の大衆組織としての自治会運動として展開されてきた。しかし学生個々をとって見た場合、一人一人ちがう訳です。ところが、それを層という曖昧なカたちで把握されてきたが、全共闘運動の過程で、個の質的な差が問題にされ、学生間における対立緊張関係というものが生れてきた、すなわち個の分化の中で自分自身で考え行動していくという現象が出て来た。ですから、そこから出て来るほくの運動のイメージはベ平連運動とか全共闘運動とかは全く異質なものです。あそこにおいて自覚された個の概念を、個の問題提起をどうとらえかくていくかということにあります。

河合―全共闘運動というものが現われたということは現代の矛盾がそこに集約的に現われたのではないのか。それを探っていくことによって、ほんとうの解放の理念というものが出てくるのではないのか、と僕は思うのですが……。

笠原―そこで気をつけなければならないのは、全共闘運

運動というものをいくらとり出してきても、ダメということです。あなたは逆に、全共闘運動というような運動形態や方法に、とらわれてしまっているのではないか、と思います。だから、ノン・セクト運動というものを持って来て現在において再生しようとする考えは間違っている。ほく自身を含めて、なぜあそこで闘ったのか、それをあくまで考えたい。あの時は、直接的には、大学やベトナム三里塚の闘いに触発されたが、逆にそれは他によって、すなわち国家やセクトによって彼らに規定されていたことを意味する。その闘いのなかで息をふき返した僕らの情念や感情というものと、その意識においてどうであれ、現実には僕らが依拠せざるをえなかった運動組織は、決して相入る関係ではなかった。それは、運動の後退曲面において特に実感されたことだが、現在僕自身何かをやりえるのは、その様な直接的な政治課題などではなく、その真に在った行方への衝動の根源を探っていくことを通して、それを豊にするなかで逆生素を試みているからだと思うのです。

西塔―これまでの話で語られていないのは、セクト運動とノン・セクトの運動の関係が語られていない。そのあたりはどうとらえているのか？ 現実にはまずセクトの運動があって、そこから出て来た訳ですが、そこに

は絶対に切り離せない何かがあった、とほくには思えるのですが、逆にそこから辺りから全共闘運動からの限界性が出て来るし、またアナキズム運動からも限界性がでてくる。ほくが考えるには、ノン・セクトというのはアナキズムの反撃なのか、さらなるマルクス主義の勝利なのか、ということが分らない。

三浦―ノン・セクトというのは結局、マルキシズムのあのような指令によって動く団結に対する一つの反逆であり、一つの反省をもった新しいセクトというものは違うの？

信太―ノン・セクトとセクトとの関係については、両者とも組織というものに幻想を抱いている。たとえば小野田じょう二は革命党というものを否定しながらも終局的には肯定している。党は鏡を持たなければならぬ、自己凝視しなければならぬ、というふうに。小野田のこのような姿勢は黒田寛一が無党派が出現するのは確固たる前衛党が出来るまでの過渡的現象である、ということとを証しているようなものである。それゆえ、ノン・セクトにしても単なるスターリニスト党か官僚主義への単なる反対領域を出ていない部分が多く、それゆえセクトとノン・セクトは同一円環でとらえられないことはない。(勿論、この円環からはみでる部分もあるでしょうけれど)

ども。今日のアナキストにしても組織ばかり前面に押し出している部分にもあてはまることである。

笠原一なぜ組織的な形で運動を表現したがるのか判らない。全共闘運動の極点で個の原理というものがとらえられていながら、組織を媒介にしたときに、それが個の原理を否定するという逆説が生じた。結局、人が立上るのは理くつではないということに関しては誰れもが納得すると思いますが、ところが、そのようなところからやる行動というものが、組織論、運動論を媒介にするとき自分自身の表出回路ではなく、他の表出回路に依拠せざるをえなくなる。やれ大衆云々とか言って、何か全体というものに還元され個の原理が抹殺され、たてまえとしてのみあったのがいままでの運動形態ではなかったのか。滝田修が『現代の眼』で言っていたけれど、何故皆すぐに他人のめんどろをみたがるのか、一人を二人に二人を十人にしたがるのか。彼の言う大衆のことは大衆にまかせておけばいい、彼らの葛藤や苦しみは代わってやることはできないのだ。ということを読みその当時は感激したけど。そこには、革命主体としてのプロレタリアートをかっつてのように労働者というような階級や階層としてとらえられなくなって、この世に存在するものの全てが国家のなかにあり、それによって規定されバラバラ

にされているから、各個が闘っていく必然性があるのだ、ということなどが述べられていた。それにおいては、個の暴力の発現としての運動が問題にされているのに、それが最終的には、階級性形成、プロ独へと集約されているようにただけでないが、それでも個の問題をとらえているのとくらべるとかえってアナキストの方が遅れているのではないか。個と個の関係というものは、他による規定の中にある直接的・即時的ではなく、個がそれを否定していくことを通して、えられるとすればえられるものでしかないと思うし、決してそれは求めたり押しついたりするものではない。

信太一これまでの運動論のアナキストの誤り、恐らくマルクジストでもそうでしょうが、対象がないのに対象に對ししようとすることです。あなたのお話をぼくはいつも聞いているのだけれども、たとえば大衆運動についてですが、何か大衆とかプロレタリアートとか、幻影の対象を求めてプロバガンダしたがついているとしたぼくには思えない。

河合一しかし、それは非常に難しい問題でしょう。

信太一今の時代というのは恐らく、過去のような対象が全くないのではないですか？ あるとすれば学生位なものでしょう。

河合一だから反戦青年委員会みたいな問題がでてくるんではないですか？

信太一ですから、ぼくは反戦青年委員会とか、全共闘とか、ベ平連とか言うものは、彼らがやりたいようにやればいいのであって、われわれもやりたいようにやる。結びつく必要があったら結びつく契機もあるだろうし、

河合一けれども、つまり暗中模索で方々切り離されてやるよりも、そのような現代的な矛盾といったものを、たとえば現代的な疎外感といったものを……。

信太一それは他から支えるものではなく、自分たちが自分の志向することを押し進めていった結果結びつくものであって……。

河合一言葉としては正しいと思うけれども、けれどももっとダイナミックなものだと思う。

信太一現代は、アナルコ・サンジカリズムの全盛時代、あるいはマルクスが「共産党宣言」を書き、レーニンが「何をなすべきか」を書いた時代とは根底的に相違しているし、過去のように形成する階級がない時代に、そのようなことを旧態依然として主張するのは、きわめておかしい。

河合一だから、現代における「バンの獲得」というようなものが出なければだめだと思います。クロボトキン

が十九世紀の後半から二十世紀の初頭にかけてそのような問題提起をしたけれども、今度は現代の問題を解明したところで、あのようなものが出て来なければならぬと思う。

▽参加者がその他四人ほどあったが、紙面の都合上、割愛せざるをえなかった。尚、上記の内容のほかに問題についても論じたが、不必要と思われる部分を削除した。この討論をまとめるにあたっての責任はわたしにある。

(信太)

「アナキ」 直接購読のお願い

500円でも1000円でもバルカン社へ送って下さい。発送と同時に残額もお知らせします。

エマ・ゴールドマン著

「個人・社会・国家」

一三〇円 送料別

東京都新宿区東大久保1の464 松喜ビル
バルカン社